入間地区退職校長会会報

いるま

第45号

令和7年2月1日発行

題字・発行者
会長　比留間 英雄

中学校と地域の連携

―中学生が地域でボランティア―

副会長　渡邉 俊雄

本会入会当時、鶴ヶ島班は支部で十数人の最少の班でした。令和になり会員数が増えたこともあり、班で初めて支部の副会長を受けた渡邉です。

私は退職後、これからの社会に必要な「中学生が地域に参加する新しい地域づくり」を試みたいと考えていました。

退職して三年目、自治会長になった年、市民体育祭の会場等が変更となり、三地域からなる十三自治会の足並みが乱れ、自治会の連携は崩壊状態になりました。危機を感じた地元議員が、「小学校区で運動会復活できないか」と相談に来ました。自治会の総会まで四カ月足らず、各自治会長との面識はないし、組織は既に解体、最悪の状態でした。

私は無理を承知でこの機会に構想をぶつけ、引き受ける決心をしましたが、さらに難題が二つありました。

一つ目は、各自治会総会での承認です。臨時の自治会長会議を開催し、①独自の運動会を通し、三地域の連携を強固に。②役員・選手の負担減に。③地元小学校で開催等を提案した結果、承認を得ることができ、一安心しました。

二つ目は、中学生の参加要請の承諾です。①部活動を休みに。②ボランティアで役員補助と選手で参加。③地域のために一緒に働く貴重な体験を、校長先生にお願いしました。数日後、「職員が了解した」旨の連絡を受けた時、感謝と喜びでいっぱいでした。これで懸案の二つが解決し、残すは中学生への当日一回だけの打合せです。理解しやすい段取表を念入りに作成しました。

当日は大勢の人が集まり、予想以上の中学生の活躍で自治会長を始め関係者も喜び、大盛況で終了しました。閉会式では中学生にボランティア認定証を渡しました。

その後も、中学生は地域の夏祭り、防災訓練、スポーツ行事等に参加し、地域にとって重要な助っ人となっています。

縁は求めざるには生ぜず

入間地区中学校長会
会長　諸　範弘

入間地区退職校長会の皆様には、長年にわたり地域の教育発展にご尽力いただくとともに、私たち現役校長がその背中を追いながら歩むことができておりますことに、心より感謝申し上げます。

「人間は一生のうち逢うべき人には必ず逢える。しかも一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない時に―。」（森信三先生 一日一語（寺田清一編））という言葉を思い出すたびに、私が諸先輩方と出会えたことの大切さを深く感じております。

先輩の指導や助言は、私にとってかけがえのないものでした。先の言葉には「縁は求めざるには生ぜず。内に求める心なくんば、たとえその人の面前にありとも、ついに縁を生ずるに到らずと知るべし。」という文言が続きます。出会うべき人とのご縁は、偶然ではなく、むしろ必然であります。教育の場において、私たちはその縁を求め、自らの心を開き、謙虚さと感謝の念を持つことが大切です。

昨今、教育現場はますます多様化し、課題も複雑化しています。子供たちが安心して学び、自らの可能性を信じることができる環境づくりが求められる中で、私たち校長は、縁によって繋がった方々と協力し、学び続けることが一層重要と考えます。その意味では、今年度五年ぶりに対面形式で研究大会が開催できたことは、大変大きな成果でした。

提案者や司会者、指導者の皆様のおかげで、各分科会を通して共に学び、互いを磨き合う場が持てました。

諸先輩方が現役でご活躍されていた頃に培われた教育の精神は、今も私たちに受け継がれています。皆様から受けた教えとその背中は、現役の我々にとって何よりの道標であります。今後とも学校教育の充実と発展に向け、皆様のご支援・ご協力を、何卒よろしくお願いいたします。

（所沢市立山口中学校）

協議会 開催される

期日　令和６年11月13日（水）
会場　毛呂山町福祉会館

今年度の教育推進研究協議会は、毛呂山町退職校長会が越生町退職校長会とともに担当し、毛呂山町福祉会館（ウィズ毛呂山）において、盛大に開催されました。

来賓三名、小学校長十六名、中学校長十四名、退職校長七十五名の百八名が一堂に会し、三名の研究発表と研究協議が行われました。

開会行事では、比留間英雄会長から、教育推進研究協議会は現職校長と退職校長が教育について話し合う貴重な機会である等の話を頂きました。来賓の井上健次毛呂山町長からは、自身の経験をもとに教育環境整備の大切さについての話を頂きました。小林美音西部教育事務所長からは、現代は困難な時代ではあるが、どんなことが起こるかわくわくする時代でもあるとの話を頂きました。さらに、高沢佳弘毛呂山町教育長からは、教育実践の継承、今日的な課題に丁寧に対応し、使命感を強く持つことの大切さ等の話を頂きました。

挨拶する比留間英雄会長

研究発表では、狭山市立入間川東小学校 井上健校長から「『笑顔』に向かって～教職員の協働体制に支えられて～」。川越市立高階中学校 須澤美和子校長から「志和道」と題して、着実に成果を上げている教育実践の報告がありました。

退職校長会からは、飯能班の小見山実氏が長年にわたり関わっている「『原市場』の森づくり」についての発表がありました。

最後に、小林所長より

・資料の写真等から、校長先生の学校経営への意気込み、学校への深い愛情が感じられる。

・「笑顔」というキーワードが校長先生の様子とぴったりしている。

・中学校は、人生の中で最後の卒業式となる子もいる。

・「志和道」というキーワードは、学校全体の指針となっている。

・森やふるさとは、作っていくものであると強く感じた。

・飯能の子たちには、とても良い経験となっている。

等、指導講評を頂きました。

（文責　毛呂山班　田島 章弘）

「笑顔」に向かって

～教職員の協働体制に支えられて～

狭山市立入間川東小学校
校長　井上 健

一　はじめに

学校経営は面白いが、現実は大変厳しいものがある。七年間の校長経験から感じていることを、赤裸々にお話したい。

二　教職員の協働体制づくり

（一）ベクトルを一つの方向に

教育効果をより生み出すには、教職員の協働体制を構築することが一番と考える。職員は年齢や経験、得意分野、性格等全てが違う。校長が、こんな学校を作りたいと伝えただけで、その方向に進むかというと、なかなか一筋縄ではいかないのが現実である。メンバーも、一年ごとに変わる。だからこそ、私は四月の職員会議で熱く、よりシンプルに、自分の学校経営の考えについて伝える。

「今年もね“笑顔”に向かって輝こう！」

（二）教職員の主体性を支える

①自己評価シートの活用

・どう貢献できるか・年三回面談

②令和版学校課題研究

・教員も対話的主体的深い学びを

③業務改革の推進

・時間外勤務は月四十五時間、年間三百六十時間以内

三　実際には

この三年間、年度内に中長期にわたって休む職員への代員が不足している。本校では、教務主任や教頭が担任に入る事態にあり、この厳しい現状をギリギリのところでどうにか乗り越えている。在校時間の目標達成についても厳しい現状がある。早急に、教員の待遇改善や標準授業時数の縮小等の抜本的な改革を強く望む。

四　おわりに

どの職員も教員になった時には強い使命感があり、仕事に対して、やりがいや生き甲斐を感じ職務に奔走したと思う。教員の仕事は、崇高であり、かけがえのない職務と確信している。しかし、現状では、代員不足や「働き方改革」の波もあり、現場は疲弊しかけている。そんな中ではあるが、本校は元気で明るい職員がそれぞれの歩幅は違うが「『笑顔』に向かって」一歩を踏み出している。だからこそ乗り切れていると自負している。職員に感謝である。

「彩の国教育の日」協賛　教育推進研究

「志和道」

川越市立高階中学校
校長　須澤　美和子

今年開校七十八年を迎える本校の地域は、大正二年頃までは、下新河岸の船着場があり栄えていました。江戸時代から明治時代にかけて、江戸と川越を結ぶ物資輸送の大動脈として大いに賑わっていた古い歴史があります。

本校の目指す生徒像は、「高階中学校を母校として誇りに思える生徒」です。

◎自ら学び考え**志**を高く持つ生徒
◎思いやりがあり**和**を大切にする生徒
◎自分の**道**を見つけることができる生徒

この「志和道」の精神を合言葉に、生徒が成長することを目指しています。中学校とは、社会に出る準備をする場所、社会人としての人格を形成する場所であることを日頃から生徒に話しています。

高階中学校の特色として、主に挨拶、無言清掃、十九年目を迎える「桜踊華」を、生徒達は挙げています。

特に「桜踊華」は、川越百万灯夏まつりをはじめ、地域主催の催しで演舞を披露しています。「あいさつ運動」は校内だけでなく、定期的に校区の小学校に出向いて実施しています。

学習面では、基本は学校の授業という意識を持ち、話し合い、学び合いの授業を展開しています。本市は「川越授業スタンダード」という型式、「めあて、見通し、学び合い、まとめ、振り返り」という授業の型があります。本校もこの型式に則って展開し、話を聞く姿勢を大切にしています。必ず話者に体を向けて耳を傾けます。

「志」を高く持ち、人と人との「和」を大切にし、自分の「道」を切り拓いていくこと、三年生の頑張りと下級生の頑張りが高中プライドを作り、社会人としての人格を形成します。高階中学校の伝統である高中プライドがあるのは、三年生が下級生の時に上級生を目標に努力してきた背景があります。

「志和道」の精神を受け継ぎ、社会人としての人格を育成する教育を推進しています。

新入生を迎える桜踊華の演舞

「原市場の森」づくり

退職校長会
飯能班　小見山　実

飯能市立原市場中学校に隣接する山林は、かつて「学校の裏山」と呼ばれていました。

バブルの頃、住宅建設業者が取得しましたが、開発が頓挫し、その後次々と転売され、全く手つかずの放置状態でした。

杉や檜、雑木が欝蒼と茂り下草も生えず、校舎や校庭が日陰となり、一部斜面の崩落も見られ、教育環境の悪化や安全面からも、早急の対策が急務でした。

私は、平成二十年度からも、退職前の三年間、隣接する原市場中学校に勤務しましたが、荒れた「裏山」を整備し、より良い環境の下で子供たちに学校生活を送って欲しい、と強く願っていました。

そんな時、ＰＴＡや自治会、教育後援会、まちづくり推進委員会の方々が中心となり、山林の取得、整備、活用について話し合いが行われました。

平成二十年九月に山林の取得を飯能市に要請し、翌年、市が市有林として取得することが決まり、「裏山」を「原市場の森」と名付けて、具体的に整備してゆくことになりました。

平成二十二年度から埼玉県武蔵野の森再生事業の補助金をいただき、約二千本の杉・檜を伐採し、そこに約五百本のモミジ、カエデ、桜、つつじなどをＰＴＡや地域の方々と一緒に、生徒たちも植えてきました。

平成二十三年度からは、「原市場の森を育てる会」を地域の方々が中心となって組織してボランティアを募り、毎月第一日曜日の朝に森の整備を行っています。

私も退職後、十三年間森の整備活動に参加してきました。荒れ放題の山が、春に桜、つつじなどが咲き誇り、秋には見事に紅葉し、地域の方々の自慢の森に生まれ変わった姿に、感慨深い思いです。

「原市場の森」が、これからも地域の森として多くの人の憩いの場となり、末永く愛され続けていくことを願っています。

春の原市場

生きがい

「所沢の母」を目指して

所沢　川地康子

会社員時代、SE（システムエンジニア）としての仕事が辛く、占い師に「占い師が一番向いている」と言われ、いつかは占いをやってみたいと思っていました。

教師の定年を待って、新宿の手相の学校に入り、修了すると様々なお店で観させて頂きました。手相は性格と今置かれている状況を端的に表しています。手相は最短半年位で変化します。六か月の胎児にも手相が見え、手相は脳と手が繋がっているからだそうです。

一方、生年月日で観る算命学の奥が深いことを知り、三軒茶屋の学校に七年位通い、臨位を頂きました。この学校は進むのが早く必死でした。算命学と共にタロット占い、星占い等習いましたが、算命学の奥深さに惹かれ、現在は「算命学・手相・タロット」の三つで総合的に占っています。占いをする中で、子供が結婚をしないとか、結婚したいが相手が出来ない等の相談が多く婚活相談もしています。算命学では、結婚相手が宿命にいるか、どんな人が好いか等も分かります。もちろん子供の星があるか等も分かります。算命学は古代東洋思想から中国で四千年かけて体系化されたもので様々なことが分かります。人の生から死まで含まれています。ただ婚活はすごく気が疲れます。少子化の問題も簡単には解決しないし、様々な取り組みが必要でしょう。婚活は区切りがついたら辞めようと思っています。現在、経費節減のために自作のホームページも作っています。

「私も元気です展」にて

占いに来られた時、思い悩んでいる様子で大丈夫かなと心配になる人が、帰りには明るい表情で元気に帰られる様子を見ると占いの力ってすごいな、やってて良かったと思います。

定年後すぐに始めた占いから、婚活も含めて二十年弱になります。この先どこまで続けられるか分かりませんが「所沢の母」を目指して皆様のお役に立てれば幸いです。

写真は、「私も元気です展」での手相占いの一コマです。三日間疲れましたが盛況でした。

船旅でリセット

坂戸　小谷野　健史

退職して二年間、関係する仕事や委員、自治会役員などをずるずる引きずり、何も変えられずにいた。しかし、好きな船旅での世界一周は百日を超えるので、すべて断ることができた。

今も大会に出るランニングやクイーンエリザベスのフロアーに立った社交ダンスはここから始めた。

これまでに出会ったことのない人達にも巡り合えた。写真講座で批評しあった札幌の実業家、ランニングを勧めたアフリカの砂漠に電波網を整備した男性。デッキゲームのライバル大企業の会計士、風呂で会った著名人や講師など。

貴重な体験もした。設定したベルサイユ宮殿の晩餐会や、次々に史跡が現れるセーヌ川の航行も驚いた。イスタンブールで正装して何も知らずに無邪気に割礼式に向かう少年。インドのクリークで上半身裸で投げキッスをしてくれた水浴びの少女。コンポステーラで長い巡礼を終えて抱き合う老夫婦。ジュノーでのアメリカ独立記念日。

比べて体感したジャマイカの密林とスワードの氷河のウォーキング。砂漠の中のスエズ運河と、ワニ等、野生生物が多いパナマ運河の航行。

国際情勢にも出くわした。ソマリア沖の海賊対策での灯火管制、三日間の自衛艦やドイツのP３Cの偵察、護衛。観光地で見た大型銃を携えた兵士。帰ってからその場所でテロが起こったとの画面に妻は思わず「焼き栗食べた所だ。」

当たり前のことも体感すると違う。西に向かって航行する船は、毎日が二十四時間より長い。初めてお目にかかる南の空に星々が沢山輝く。甲板での観察会が混んでいたので、反対側で妻に説明していたら大勢の人が集まったので一緒に楽しんだ。ニセ十字星は大きかった。

日付変更線は世界を一周してくると不思議さが飛行機と違う。この航海記録に本当に一日がない。

何よりこのリセットで私の夢が叶った。子供たちへの交通指導員になることである。交通事故は、中学生時代の幼馴染の命を奪ったからである。

スエズ運河にて

私の本棚から

『人間の運命』

芹沢光治良　著

越生　比留間　英雄

読んできた本を語ることは、気が重い。心に残る本は多いが、一冊に絞れば標記の本になる。

私は昭和十八年生まれ。貧しい少年時代は唯一の娯楽が読書であった。以来、本に親しんできた。

ほぼ全作品を読んだ作家に芹沢光治良の他、吉村昭・藤沢周平・山本周五郎・夏目漱石・井上靖・高田宏・中野孝次…がいる。それぞれに忘れられない本がある。

教職に就いた頃から芹沢光治良（以下、光治良と略す）を読んできたが、『人間の運命』に出会って深い感銘を受けた。それは、自伝を描いた全十四巻の大河小説である。

主人公の森次郎は沼津の網元の家に生まれたが、四歳のとき両親が天理教に入信し全財産を教団に捧げ、次郎を残して家を去る。

祖父母と貧しく暮らすなか、篤志家の援助で中学へ進学できた。

その後も援助者が現れ、第一高等学校、東京帝国大学へと進む。

卒業後、農商務省に就職するが行政官の職務に失望。休職して妻を伴いパリに留学するが、二年後に肺結核を発病。スイスの高原で療養を続けるうち、文学に生きることを決意する。健康が回復し、三年ぶりに帰国。講師の傍ら応募した小説が一等になり、それから作家の道を一筋に歩み始める。

戦時中は耐乏生活のなかで創作を続け、戦後も力作を発表する。そして『人間の運命』の大作が生まれた。森次郎の人生は、光治良そのものと言える。

作品は多くの人に愛読され、昭和四十年には川端康成の後を受け、日本ペンクラブ会長に就任した。

平成四年に九十七歳で亡くなるまで、数多くの名作を残した。

退職後、改めて『人間の運命』を熟読して、苦難を乗り越え誠実に生きる姿に感動した。光治良との出会いを、深く感謝している。

芹沢光治良コーナー

「会員交流のつどい」報告

幹事長　柳　榮治

十月十二日（土）午前、「ウェスタ川越」にて、会員四十七名の参加を得て開催されました。

◆講演内容の要旨

講師　川柳作家　大森昇司氏

柳名　麦そよぐ

演題　「川柳をもっと楽しむために」

1　川柳と私

川柳との出会いは、三十年位前、毎日新聞の「万能川柳」欄です。初入選の句は、**『見送られ角曲がるまで背にカ』**でした。

2　俳句と川柳の違い

①俳句は自然を題材に詠む、風景画。川柳は人間を題材に詠む、人物画である。②両者とも、言葉をギリギリまで削って五七五に整える。③俳句には季語があり、川柳にはない。④俳句の切れ字は使わず日常語の言葉で表現する。

3　川柳の句材（ネタ）をどうやって見つけたらいいか

①人間観察に尽きる。②「オヤッ？」と思った瞬間を見逃さない。③自分の経験、人から聞いた話、テレビの情報などを加えてその「オヤッ？」を面白おかしく膨らます。④ネタは日常の様々な場面にある。⑤ネタを見つけたらすぐにメモる。

4　見つけた句材をどう五七五で表現するか

①先ずは、五七五にしてみる。何回も口で唱えてリズムを整える。②言いたいことにピッタリの言葉を見つける。③推敲を繰り返す。④差別語は使わない。標語やダジャレ句は感心しない。

『ホテルだと暖房強にできる妻』

『聖書よりヒゲ剃り欲しい旅の宿』

5　麦そよぐ流のまとめ

多くの川柳に触れて、楽しさ面白さを実感してください。良い句とは多くの人の心に響いて、共感をもらえる句です。公募川柳に応募するなど、第三者に評価してもらいましょう。

麦そよぐ氏の句で大笑い！

会員の声

彩を添える合唱と俳句

川越　小俣　惠美子

退職して児童相談所に勤めて早五年目。週に二日、勤務地から公園を抜け、徒歩三十分の所にある息子宅に通い、孫の世話をしている。

この日々の生活に彩を添えているものが、合唱と俳句の世界だ。

混声四部合唱のアルトを担当し、団員についていけるよう、月二回ボイストレーニングに通っている。

俳句の世界では、初心者講座に顔を出したことが契機となり、月二回の句会に兼題をいただいて投句している。十七音に、景が浮かび、情が漂うよう、季語と題材の取り合わせや言葉選びに、日々四苦八苦している。また、取り上げていただいた句は、句歴として色紙に書いて残せるよう、書も習い始めたところである。

ムラサキシキブが、つやつやした青色の実をつけ、実紫となった。秋の季語である。通勤中に足を止め、気づけば、句を浮かべている。

喜怒哀楽の充実は人生の充実

坂戸　柴﨑　利美

退職して三年目。男はつらいよの「寅さん」のような人間が目標です。○初任者指導：今年は四人の新卒女子を担当。涙が出るほど真面目な人達です。そんな新しい先生達が、急に子供達を導く立場になりました…。彼女達を通して日本の近未来が透けて見えるようです。○木造校舎の廃校巡り：県西部には廃校になった木造校舎が今でも存在します。バイクで巡っています。飯能旧南川小など趣があります。同じ敷地に明治期の校舎も現存します。校庭に佇むと子供達の歓声が聞こえ、一緒になって走っている自分を感じます。卒業生の「B29が北に向かうのを校庭で見た」など、タイムスリップ感が何とも言えません。○反面教師：①スーパーで美しく並んだ商品を荒らさない。②ガニ股で階段を降りない。③地域活動は楽しく参加し、文化・慣習を尊重する。

PTAにお世話になって

川越　佐野　勝

川越市教育委員会で市PTA連合会の仕事を担当し六年目になりました。子供の健全育成を願い、保護者と教職員が協力・共同し、教育環境や安全安心な環境を整え、学び・高めあっていく任意の活動団体です。しかし、近年「加入・非加入の問題、共働き家庭の増加、活動や役員の強要」等を理由とした「PTA不要論」がメディアでも取り上げられています。

現在のPTAの意義に加え、更なる活動の可能性を求めていかなければならないと感じ、自己実現を図る魅力ある活動や学びの場として発展させることを考えています。

川越市PTA連合会は、協力的な組織であり、みんなで学び合い、活動をしてよかったといえることを目指しています。

私は、その方々と今日も楽しく勤務をさせていただいております。

園長としての日々と感謝の気持ち

狭山　田辺　曉己

入間市内の私立幼稚園の園長として六年が経とうとしています。毎朝五時に起床、七時半に家を出て夕方五時頃までは、子供たちと共に幼稚園で過ごしています。

園には、現在プレ保育の子供を含めて二百四十人が在籍しており、その中には私の孫も二人います。成長を見守る「じいじ」としての顔もあります。本当にありがたい限りです。

現役時代には多くの先輩や同僚の先生方から「教育とは何か」を学び、それが今も園長としての心の支えになっています。感謝の念でいっぱいです。

毎朝登園してくる園児一人ひとりに「○○ちゃん、おはよう！」と名前を呼び、元気よく挨拶をすることを心がけています。子供たちの顔と名前はほぼ覚えています。この挨拶が今の私の生き甲斐であり、活力源となっています。

ふと想う

飯能　伊藤　誠

退職から七年目。未だに学校とのつながりある仕事場にいます。そんな中、若手の研修の様子を見ていてふと想う事があります。

私の初任校は大規模校でした。そこには個性豊かな多くの先輩がいました。毎週のように誰かが研究授業を公開しているのが日常。様々な教科領域で研修に励む先輩達の姿を見ていました。教えられるというより真似ながら力をつけていく日々でした。様々な先輩を真似ました。その中の一つ、魅力的な学級経営をする先輩が隣のクラスでした。密かに廊下に出て板書を真似たものでした。二十年以上経たある時、その先輩が育てた後輩教員が私の板書を見て一言。「私も同じ弟子です。」驚きと共にちょっとした喜びでした。今研修でもがいている若手も、真似でき

る先輩との出会いがあれば幸せだろうなと、ふと想う事があります。

若い先生方を支える

所沢　出居正之

六十歳での定年から二年、再任用校長として勤務しています。

私が教員になった時分は、学校は「多様性」とは程遠い日々でしたが、一方では、まだ「寛容さ」が、人々の間にはあったように感じます。私自身、たくさんの失敗をするたびに、同僚の先生方、保護者、生徒に助けられてきました。

今日、学校現場では、「あるべき姿」をすべての面で求められ、保護者や社会の目も、目指す方向があっているだけでは、認めてもらえない時代になっています。

それでも、とくに若い先生方が、子供たちの成長を願い、悪戦苦闘しながら頑張っている姿を見るとき、応援したい気持ちでいっぱいになります。微力ではありますが、先生方を支えていくことが、これまでお世話になった方への恩返しになると信じて、勤務している毎日です。

地域の教え子たち

日高　相田　香

在職中、特に校長になってから、地域の協力がいかに大切かが分かりました。学校だけでは解決できない事に協力いただき、その結果、行事などでは大きな成果をあげることが出来ました。では、私は自分の地域に何か貢献していたのだろうか。貢献できることを考え、退職後、地域の子供たちを対象に、ボランティアで学習塾を開くことにしました。中学生を中心に週二回、午後七時から二時間ほどです。六年間で三十六人。今もフルタイムで働いているので大変な時もありますが、分かった時のうれしそうな表情を見たり、自宅付近で散歩していると挨拶してくれたり、「今年は大学受験で、また教えてくれますか」などと言われたりしています。最近は、地域のためだけでなく自分の励みにもなり、元気の元となっています。

将来のある生徒のために

入間　野口隆司

退職後六年間、入間市にある日々輝学園高等学校に勤務している。生徒数は約三百名。登校型の通信制高校である。教育理念は、それぞれの生徒の持つ良さを大切にするきめ細やかな教育だ。学習面や精神面で支援が必要な生徒、特に不登校経験のある生徒が多く在籍している。不登校生徒数はコロナ禍後も増え続け、保護者からの相談も多い。学校へ通えなくなった原因は様々であるが、保護者の気持ちを察する度に、生徒の将来に夢と希望を与え、成長させたいと思うばかりである。入学後の生徒と接することも多く、中庭で生徒と話すことが楽しみの一つである。三年生ともなると選挙権を持つ歳となる。進路活動での悩みもよく聞く。生徒と話す内容も三年間で変化してくる。今後も、各教育機関の方々のご苦労にも応えられるよう、もう少しの間頑張りたい。

やりたいことリスト

入間東部　忽滑谷　美恵子

退職して、来年で十年目を迎える。先日、美術館で「我は天年」仙厓禅僧の墨絵の一文を読む。与えられた寿命を大事に感謝し、生き抜くことの教えだそうだ。

人生を楽しむために、死ぬまでに「やりたいことリスト」を考える。書き出し上々だが、どこの場所で何をするか具体性や年齢、現実味様々に自身と向き合う。健康や趣味、学び、挑戦、習慣などが並ぶ。

朝晩の運動や深い呼吸。隅々まで新聞を読む。ゴルフの百切り。美術館、映画館、コンサートへ。一人旅。英語アプリの語学。牧場で馬の世話。図書館に通う。健康麻雀であがり役を付けて勝つ。着物を着て出かける。近所のランチ巡り。畑仕事。断捨離と片付けでミニマリスト風生活。終活ノートを書く等々。生活の質や自己の向上を図りながら、思い出作りに励む、元気な高齢者でありたいと古希を前に考える。

健康で楽しく

所沢　佐藤佳岳

退職して三年目が過ぎようとしています。二年間は、拠点校指導教員として、十人の初任者を指導し、一緒に楽しく、時には悩みながら過ごしてきました。各々の経験や性格もあり、「育てる」と言うことの難しさとともに、やり甲斐を感じながら。

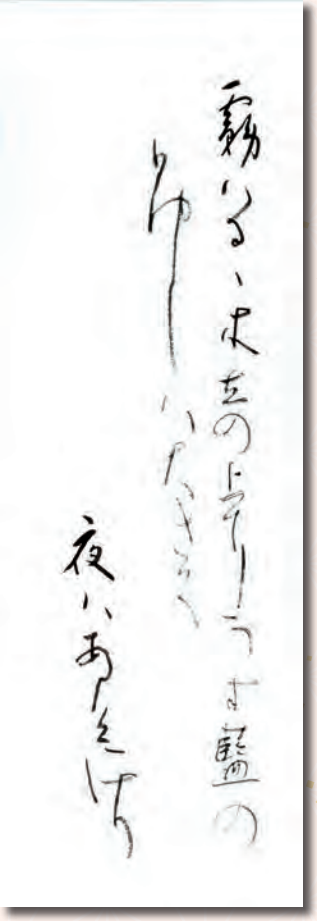
そんな拠点校指導教員を続けていて、やはり授業の楽しさや大切さを改めて痛感しています。今年度は、もう一度授業をしてみたいと言う願いが叶い、小学校専科非常勤講師として、市内の小学校で理科と算数の授業をしています。

やはり授業は難しい。でも楽しいです。日々初任者と同じように悩みながら、実践しています

休みの日には、ゴルフで汗を流したり、見聞を広めるため東京散歩に出かけたりしています。

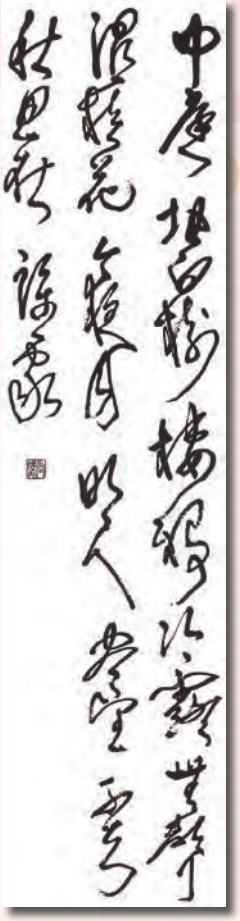
作品の窓

書

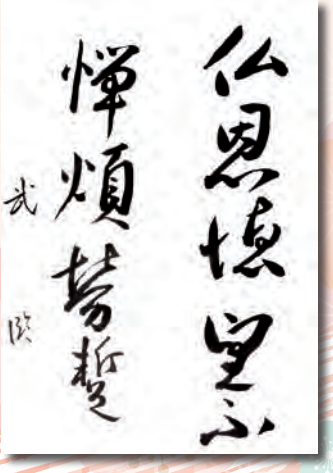


「古泉千樫の短歌」
所沢　深田　登志子

「素十の句」
川越　新井　ヨネ（陽甫）

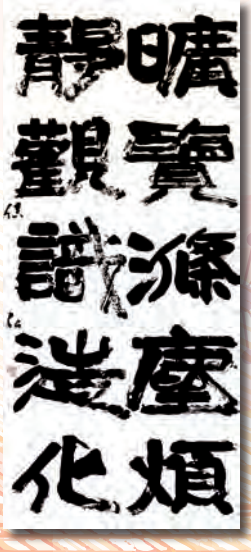


「十五夜望月」
飯能　平沼　尚



「空海　風信帖（第一通）」
毛呂山　中島　武

「春風秋霜」
所沢　横須賀　邦子（倖涛）



「立言対句」
飯能　佐藤　信弘

編集後記

年二回発行の「いるま」では、様々な活動報告や会員の皆様の生き方等をご紹介しています。紙面を通して会員相互の交流が図れ、お声がリアルに届くよう編集委員一同総力を結集しております。

読みやすい紙面作りを目指し、カラー化も図り、今号から、数年来検討してきました企画を取り入れました。

「私の本棚から」というコラムです。ご自分の読書人生の中からこれまでに感銘を受けた書物や、好きな本、人生の指針としている書籍、心に残る一行、あるいは、お薦めの一冊など、本にまつわることを自由にご紹介していただくコーナーです。ご投稿並びに、ご愛読いただければ幸いです。

入間地区の十一班のホームページも併せて御覧ください。

最新情報が担当者のご協力により次々に更新されています。（熊本）

編集委員　比留間　野口
西　澤　田　島
熊　本　丸　山

入間地区退職校長会会報
第四十五号

発　行　令和七年二月一日
発行者　会長　比留間英雄
越生町成瀬一四一－一
印刷所　六三四堂印刷株式会社